

すこやかであれ

ピーター島田



全人のいやし

Holistic Healing

子羊の群れキリスト教会

すこやかであれ

ピーター島田

子羊の群れキリスト教会

愛する者よ

あなたのたましいがいつも恵まれていると同じく

あなたがすべてのことに恵まれ

またすこやかであるようにと わたしは祈っている

ヨハネの第三の手紙 2

500円(税込)

にわたつて受けるようになる。胃瘻や鼻チューブ、さらには中心静脈栄養などを行ない、老人をできるかぎり長く生きさせるのは間違いだ。延命治療は、本人のためというより、家族の感情や医療違反と言われたくない病院側の都合に合わせているだけに過ぎない。

現代医療は「死」をまったく考えていない。延命治療は死を少しばかり先送りすることはできるが、その代わり本人に苦痛を与え、人間としての尊厳さえ奪うものである。

医学が絶対だと盲信している者は、氏の発言は過激と言うでしょうが、人生の最期を医学ではなく神に任せて逝きたいと願っている者には、心強い意見です。私は信じるのですが、神は人間の肉体の最期を苦悩ではなく平穩のうちに終わらせるように造られているはずです。人はもともと平穩のうちに死を迎え、人生を全うすることができる。神の用意されている自然死を、医療が介入し阻止してはならないと思います。科学文明を過信すると、大きな落とし穴にはまりますよ。

まだ若い人ならいざしらず、老人に延命治療を施すのは、かなり問題です。私なら、延命治療は断ります。

す。

医者の中でも自然死を見たことのない者が大半だそうです。入院患者の血圧が下がれば、急いで昇圧剤を入れる。少しでも延命するのが医者の責務だと思っ

「平穩死」という考えがあります。高齢者が家庭で自然死を迎えることを言います。平穩死を提唱する医師長尾和宏氏は、現在の末期治療の現状をこう言います。(注8 50頁)

自力で歩けず車椅子で来院された患者さんに抗がん剤を打ち、衰弱してくると入院させ、高カロリー輸液につなぎます。お腹や胸に水が溜まるとそれを抜き、抜いた分また輸液を注入します。水膨れになつて苦しむので、最後には麻酔で眠らせて、病院のベッドで臨終となります。それが日本の多くの終末期医療の現状です。

医療者は生活の質(quality of life)にあまり目を向けようとしません。末期がんで余命一ヶ月の患者さんに対して、QOL(生活の質)を犠牲にして抗がん剤治療を続ける現実にも疑問を感じます。本当のQOLとは、「命の品格」なのです。

老衰してものが言えなくなつてからでは遅すぎるので、リビング・ウィル(死亡選択遺言)を作つて、「私は延命治療を一切拒否します」の一文をしたためておきます。家族の者にその旨を伝えておくのはキリスト者としての務めです。家人に負担をかけるような死に方はしたくない。

よく生きる者は、よく死ぬ。私はそう信じるので、けんめいに走り、そのまま次の世界に入りたい。

現代日本では「医学の常識」という非常識が幅をきかせています。一部の医師は、薬漬けの老人介護や、あまりに人為的な延命治療に批判の声をあげていますが、大勢は「医学の常識」派です。「一日でも延命を試みるのが医者の責任だ」と、医学の常識は言います。だから一般人も、「人生の最期はお医者さまにゆだねなければ……」と信じている。延命治療をしないでは医師の倫理に反する、いや法規違反だと、多くの医者は思っている。

おかしいですよ。ほんとうに信ずべきは、神が与えた自然のいのちです。生まれるに時あり、死ぬに時あり。不自然な死に方をするのは、人間くらいでしょう。動物でも、時至れば、静かに死にます。もちろん自然死で

ほんとうにそうだと思います。いのちの品格というものがある。私のことばで言うなら、「いのちへの畏敬」(reverence for life)です。老人はポンコツ自動車ではないのです。あちらこちらいじつて、「精一杯やりましたけど、ご臨終です」と、廃車するように投げ出すのですか。ひどいじゃないですか。

いのちは神さまからの賜物です。ならば人に任せるのではなく、最期は本人の信仰によって決めるべきです。私ならキリストに全託し、医療のお世話にはならない。医療よりも自然死を選びます。

「医学の常識」や一般人の「最期の時の看護の仕方が分からない」という恐れが強いので、多くの人は病院や老人ホームのような施設で最期を迎えますが、アンケートをとれば、大半の人は、自宅で亡くなりたいと希望しているそうです。特に胃瘻や人工栄養で生きている患者は、「もうイヤだ、自分の口で食べて死にたい」と言います。

死ぬことが、そんなに悪いことですか。本人が自然死を希望するなら、まわりの者の希望で延命を図る方がよほど悪いのではないかと、私は思います。ほんとうは、自宅で死ぬのがいちばんいいのです。自然死を迎えるこ

とができるからです。

自宅介護は、わたしたちが想像するほど大変なものではありません。

と言つても、末期に近い者がいると家族の者はやはり動揺します。本人の意思がはっきりしている間に、準備しておくことがあります。地域の病院で在宅診療や在宅治療をしてくれる医師がいないか、インターネットなどを通じて調べておくといひでしょう。また病院によっては「地域医療室」を設けているところがあります。そこで相談しておくという手もあります。在宅死を認めてくれる医師を知っていれば、心強いですね。

延命治療に関する自分の考えをはっきりさせておくことは大事です。リビング・ウィルを作成し、書面で自分の意思を明記しておきましょう。具体的には、日本尊厳死協会に入会するという方法があります。これは信頼できる団体です。(注9 50頁)

リビング・ウィルには、はっきりとあなたのキリスト信仰を記しておいてください。

老人介護や治療について少し語りましたが、私はいちばんいい末期治療は賛美と聖餐式だと信じています。

私なら、自分の意識がある限り、毎日聖餐式をしま

す。聖餐式は、牧師や聖職者がいなくても、キリストの前で一人でできます。家族に賛同する者がいるなら、共に聖餐式に与まかってください。

キリストのからだであるパンを食べ、血潮であるぶどうジュースを飲むことにより、宇宙大のキリスト意識につながります。身体はもう自由がきかなくなつても、あなたの霊は大空に飛ぶ。キリスト讃歌に、魂が震える感動があります。これが最高のいやしです。

賛美と聖餐式は、礼拝そのもの。最後の最後まで、キリストを礼拝し、そのまま天の礼拝に移行できたら最高だと思いませんか。できます。

賛美と聖餐式を行なつていれば、ボケることは決してない。私は末期の人の病床で幾度も見聞きました。その人の意識は天のリアリティに融合し、この世と彼の世の境が消えつつあります。聖なる光が部屋中に満ちるようになります。

天使たちがいる……きれいな庭が見える……天国の食べものはおいしい……など、地上の者には少々異常なことを口走るようになりますが、おかしくない。天のリアリティが迫ってきているのです。いのちとは、地上だけ

でない、天に続くものなのです。「全人のいやし」 holistic healing とは、地上と天を統合するいのちを言うのです。天のリアリティを感じるようになると、人は死への恐れから解放されます。

死は全人のいやしです。古きは去り、新しいのちに、復活のいのちに生きる聖なる儀式なのです。

死は勝利にのまれてしまった。

死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。

死よ、おまえのとげは、どこにあるのか。

死のとげは罪である。罪の力は律法である。

しかし感謝すべきことには、

神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである。

(一コリント 一五・五五―五七)

参考文献

注1 石原結實 (本文6頁)

イシハラクリニック院長。西欧医学の医者であります。自然食の権威でたくさん著書があります。朝食にニンジン・リンゴジュースを勧め、昼は蕎麦、夜も玄米食中心の生活を推奨します。身体冷えが、諸病の原因だと言います。

「体を温める」と病気は必ず治る 三笠書房

「体の冷え」を取るとなぜ、病気が治るのか 三笠書房

クスリのいらぬ健康法 三笠書房

プチ断食ダイエット サンマーク出版

注2 安保徹 (本文8頁)

新潟大学大学院教授。免疫学の世界の権威。免疫性と病気の関係を説明され、一般向けの啓蒙書を多く出されています。

免疫革命 講談社インターナショナル

病気は自分で治す 新潮社

「薬をやめる」と病気は治る マキノ出版

注3 森下敬一 (本文17頁)

自然医学会会長・お茶の水クリニック院長。血液生理学の権威で、腸絨毛組織による造血説は革命的。癌・慢性病の自

然医食療法を提唱され、多大の成功を収めています。
ガンは食事で治す ベスト新書
自然医食のすすめ 美土里書房 その他、著書多数

注4 (本文21頁)

S. I. McMillen, M.D. & David E. Stern, M.D., *None of These Diseases* (Fleming H. Revell, Grand Rapids, Michigan)
男子は割礼 (circumcision) を受けてくることで、病気になる率は少なくなり、成人して結婚した場合、パートナーの女性が子宮癌になる率は驚くほど低いと言います。

注5 新谷弘実 (本文31頁)

病気にならない生き方 サンマーク出版

注6 安保徹 (本文41頁)

最強の免疫学 長岡書店

注7 中村仁一 (本文45頁)

大往生したけりや医療とかかわるな 幻冬舎新書

注8 長尾和宏 (本文47頁)

「平穏死」10の条件 ブックマン社

注9 日本尊厳死協会 (本文48頁)

本部事務局 Eメール info@songenshi-kyokai.com
〒113-0033 東京都文京区本郷2-29-1 渡辺ビル201

参考資料

資料1 以下は、「積極的ものの考え方 (Positive Thinking)」

の創始者、ノーマン・ベンセント・ピール博士のガイド・ポスト社から出た *One Man's Miracle* (一九八三年) を私が翻訳し、「まじろの木」(一九八三年85号から87号) に掲載したものです。

私はキリストを信じる者として、この証しが本当のものであることを知っています。奇蹟は起きたのです。しかし、同時に、この奇蹟は西欧人の典型的な思考パターンに沿っていることも知っています。「癌は悪である」、「現代医療に間違いはない」という前提があるのです。

本書において、私はその前提はかならずしも正しいものではないと言います。私はハリー・デイキャンプ氏の信仰を尊重するので彼の証しを掲載しますが、彼の前提まで正しいとは思いません。私も今までたくさんのキリストにある奇蹟を見ましたが、「人間の信仰が正しいからいやされる」のではなく、あくまでも「いやしは神のあわれみ」によるものであり、時には「いいかげんな信仰であるにもかかわらず、いやされる」のです。

一人の奇蹟

ハリー・デイキャンプ

底冷えのする三月のある午後だった。

とても気分が悪い。私はニューヨークのスローアン・キッテリング記念病院で、手術後の回復を待った。癌のため、膀胱切除をしなければならなかったのだが、結局医者には切除はせずにそのまま腹を閉じてしまった。最悪の状態である。

五時半頃、副外科医が部屋に入ってきたが、いつもよりのろく、憂うつそうな顔つきをしている。私のベッドのかたわらに腰をおろし、「気分はどう？ ハリー」と聞いてきた。「気持ちが悪い……痛い……」

カラカラになった唇から、しわがれた声で喋るのが、私のできる精一杯のことだった。

「膀胱を取り除かなかったんだって？」 私は吐き出すように言った。「なぜだ？」

しばらく黙っていたが、彼はやがて重い口を開いた。

「ハリー、あなたのお腹を開けたんだけど、癌が身体のあるところに飛び散って……その、手術不可能な状態なのです。癌になっているところを全部切るなら、文字通り、あな